

動詞「念」「思」字の意味用法

——中国文献と日本文献を比較して——

柚木靖史

一 研究の内容と目的

漢字「念」は、思考に関わる字義を有し、「オモフ」という訓が存する。本稿では、漢語動詞「念ず」の意味を念頭に置きながら、中国文献の「念」の意味と日本の上代文献の「念」の意味を比較し、漢字の「念」が中国からどのように日本にもたらされたのかということについて検討する。そのために、まず中国の「念」の意味と日本の上代文献の「念」の意味とが完全に一致するのか、あるいは、日本の「念」の意味に日本特有の特徴が見られるのかということについて検討する。漢字の「念」の意味を明らかにするためには、「念」を単体として考察の対象に据えるよりも、他の漢字との比較によって「念」の意味を考える方が、より「念」の意味の特徴を浮き上がらせることができるかと考えた。よって、本稿では、「オモフ」という訓を有する

複数の漢字の中から、常用漢字においても「オモフ」を表記する漢字である「思」を比較対象に据えることとする。

また、「念」は、『源氏物語』などの平安時代の和文にも見られる漢語動詞「念ず」の語幹を形成する漢字でもある。和文で使用される「念ず」の意味には、「我慢する」「祈る」という意味があるとされる。この「念ず」の二つの意味に、中国文献や日本の上代文献の動詞「念」字の意味がどのように結びつくかということも検討したい。標題に動詞「念」「思」字と表記したのは、日本の漢語動詞成立の過程を見据え、漢語動詞の語幹を形成する漢字の「念」「思」という意味である。

筆者が最終的に明らかにしたいことは、漢語動詞「念ず」に、なぜ「我慢する」と「祈る」という別義のようにみえる意味が存するのかということである。本稿では動詞「念」字の意味について、動詞「思」字と比較するという方法で明らかにしたい。

二 中国文献の「念」「思」

二―一 漢籍の「念」「思」

まず、日本の上代文献が書かれる前に中国で成立し、日本の文芸書、歴史書に影響を及ぼしたとされる『史記』『文選』を対象に、「思」字と比較しながら動詞「念」字の意味について検討する。

二―一―一 『史記』の「念」「思」

(一) 「念」の意味

まず、『史記』の動詞「念」字の意味について、用例に基づきながら、個々の意味について検討し、全体に共通する意味をまとめると、動作を表す「深く心に留める」という動詞と、抽象的概念を表す「心に留めた思い」という名詞とがある。ただし、名詞の「念」にしても、訓読すると、「オモフコト」のように形式名詞を動詞の連体形が修飾した形で読まれたりする。このように、「念」を「オモフコト」と読むことによって、名詞の意味を示すことが可能だということは、特に訓読が分からない「念」の場合、名詞の「念」とするか動詞の「念」とするかは、判断できないことが多い。したがって、品詞と意味との関係については、訓点資料によらない限りは、考察が難しいといえよう。

本稿では、動詞「念」字と標題で示しているように動詞の「念」を取り上げる。そこで、主格や目的格に立つ「念」は、名詞的用法の可能性があると考え、考察対象から除いた。

さて、次の用例の「念」は、いずれも述格に立つことから、動詞の「念」と判断され、いずれも、「深く心に留める」という意味である。

用例1の動詞「念」字の主体は従臣で、内容は「帝の徳を信じること」である。用例1の「念」の意味については、注に「心の中に深く思うの意」とある。(340頁) 用例2の動詞「念」字の主体は子嬰で、内容は「王位についても、長く自分の守るべきことを思いとどめる」である。用例3の動詞「念」字の主体は帝で、内容は「夷狄に異変が起ころはせぬかと常に心配する」である。用例4の動詞「念」字の主体は帝で、内容は「広国を丞相にすることを願う」である。用例2に「長」とあり、用例4に「久」とあるのは、「念」が持続的な行為を意味することを表している。持続的に思うということから、「念」の意味は「心に留める」といったことが考えられる。用例の「念」の具体的な意味は、「心配する」「信奉する」「執心する」「願望する」と訳せるもので、いずれも持続的で、感情的かつ強い思いである。

1 觀望廣麗、從臣咸念、原道至明。(史記一 本紀 秦始皇

本紀第六 339頁3行目^①

2 獨能長念卻慮、父子作權、近取於戶牖之間、竟誅猾臣、為君討賊。(史記一 本紀 秦始皇本紀第六 417頁3行目)

3 朕既不能遠德、故憫然念外人之有非、是以設備未息。(史記二 本紀 孝文本紀第十 643頁10行目)

4 廣國賢有行、故欲相之、念久之不可、(史記十 列伝三 張丞相列伝第三十六 259頁9行目)

(2) 「思」の意味

次に動詞「思」字の意味について確認し、動詞「念」字との意味の違いについて考える。

用例1の動詞「思」字は、主体が官人や人民たちで、内容が「堯のことを思慕する」である。用例2の動詞「思」字は、主体が象で、内容が「兄の舜のことを思慕する」である。用例3の動詞「思」字は、主体が皐陶で、内容が「帝の道を助けるため」のさまざまな方策を思索する」である。この「思」について、新釈漢文大系の注には「審らかに考えて、心をつくして」とある。(95頁) 用例1や2のように、「堯」「舜」のような人を対象にとる例は、「人を思慕する」という意味に解釈できる。これに對して、3の動詞「思」字は、「方策を思索する」という意味と解釈できる。これは、理性的な思考であると考えられる。動詞「思」字の意味は、用例1、2のように、「思慕する」といった

感情的な意味を表す場合と、3のように「思索する」といった理性的な意味を表す場合とがある。

以上のことをまとめると、「念」と「思」の意味の違いは、「念」は感情的な思いしか表わさないが、「思」は感情的な思いに加えて理性的な思索を表すこともできるところにあると結論づけられる。そして、「念」に見られたような継続性、強さといった意味は「思」には認められないことも、「思」「念」の意味の違いの一つであろう。

【感情的に人を思慕する】

1 三年、四方莫舉樂、以思堯。(史記一 本紀 五帝本紀第一 49頁4行目)

2 舜往見之。象鄂不懌、曰「我思舜正郁陶」舜曰「然、爾其庶矣」(史記一 本紀 五帝本紀第一 55頁8行目)

【目的を達成するために方策を思索する】

3 皐陶曰「余未有知、思贊道哉。」(史記一 本紀 夏本紀第二 95頁11行目)

二——『文選』の「念」「思」

(1) 「念」の意味

まず、「念」の動詞的用法の意味は「深く心に留める」であり、

『史記』の「念」の意味と同じであることが確認できる。

用例1は、「遠い過去のことを思うと、思いは尽きることなく、堂々巡りをしてしまう」という内容である。ここでの「念」は、過去の様々な事件に対して感傷的に思いをめぐらすことを意味する。「循環之無賜」とあるように継続的な思いである。用例2は、「帳を低くし、枕を近づけることを願い、腰の飾りを外し、帯を解こうと思う」という内容である。ここでの「念」は、「腰の飾りを外し、帯を解こう」という願望を表す。用例3は、「素女が弦を押さえ、その余韻が消えないうちに、楽師の太容が、『肝に銘ぜよ』と吟じて言った」という内容である。「念哉」とは、「放逸の心を抑え、心を鎮める」という意味を表す。ここでの「念」には、「心を集中する」という意味がある。用例4は、「私は、元より恨みを感じやすく、心は乱れて止まず、かつて恨みを吞んで死んで行った古人たちのことに思いを巡らす」という内容である。ここでの「念」は、用例1と同じく、過去の様々な事件に対して感傷的に思いをめぐらすことを意味するのであろう。このように、「念」は、「深く心に留める」という意味で共通し、感傷的、持続的に過去のことや将来のことに思いを巡らすことを意味する。

1 超長懷以遐念、若循環之無賜。(文選 賦篇中 西征賦 204頁3行目)⁽²⁾

2 願低帷以昵枕、念解珮而褫紳。(文選 賦篇下 雪賦 93頁7行目)

3 素女撫絃而餘音兮、太容吟曰念哉。(文選 賦篇下 思玄賦 178頁5行目)

4 於是僕本人恨人、心驚不已。直念古者、伏恨而死。(文選 賦篇下 恨賦 230頁3行目)

(2)「思」の意味

次に、「思」の意味について確認する。

用例1は、「阿房宮は、天帝の御殿の紫微宮という星に象る宮殿の造宮を思案されて作られた」という内容で、「思」の意味は「思案する」「考案する」で、「考案された」結果として、阿房が形作られたことになる。用例2は、「哀帝は、董賢を舜に見立て、彼に天下を譲った」という内容で、「思」の意味は「考える」で、「考えた」結果として董賢に位を譲ったのである。用例3は、「苦勞の日は短くて、安らかな日は長く、格別な政治をしなくても天下は太平である。楽しみにふけりこそすれ、何を考へ何を案じよう」という内容で、「思」の意味は「考える」である。ここでは、何について考えるかは述べられていない。用例4は、「世の治乱を音楽の調子の中に考え、国の興亡の原因と結果について考える」という意味で、ここでの「思」は、「国の興亡の原因と結果」について考察するという意味である。

このように「思」の意味は、「念」には見られないような「具体的で理論的な考えを巡らす」「具体的に何かを思索する」という意味を有するが、その一方では、用例3のように「念」の意味に通じるような感傷的な思いを表すこともあり、「念」との意味の違いがはっきりとしない例も存する。

このように、漢籍の「思」は、「念」と異なる意味を持ちながら、「念」と同じ意味も共有していたことが確認できた。

- 1 惟帝王之神麗、懼尊卑之不殊。雖斯宇之既坦、心猶憑而未據。思比象於紫微、恨阿房之不可廬。(文選 賦篇上 西京賦 95頁2行目)
- 2 許趙氏以無上、思致董於有虞。(文選 賦篇上 西京賦 131頁4行目)
- 3 高祖創業、繼體承基。暫勞永逸、無為而治。耽樂是從、何慮何思。(文選 賦篇上 西京賦 131頁6行目)
- 4 考治亂於律均兮、意建始而思終。(文選 賦篇下 思玄賦 178頁3行目)

二―二 仏典の「念」

(1) 「念」の意味

ここでは、仏典の「念」の意味について、妙法蓮華経の例を対象に確認する。⁽³⁾

以下の例のように、仏典の動詞「念」字は、「深」「常」と共に使われる例が多く見られる。このことは、仏典の動詞「念」字の意味が、深く持続的な思いであることを示している。漢籍の動詞「念」字にも「長」「久」と共に使われる例があったが、仏典の動詞「念」字に「深」「常」と共に使われる例が多く見られるのも、漢籍での使われ方と共通性が見られる。特に、妙法蓮華経では、「仏」を対象としている動詞「念」字が「深」と共に使われるのが特徴的である。

「深」とともに使われる「念」は、「深心」という形で、衆生や世尊の信心深い心を表し、その心でもって仏を念じるという共通した内容が書かれた文脈で使われている。

「常」と関わる「念」は、用例5のように、仏が法師を常に護念するという場合と、用例6のように衆生が常に観世音菩薩を念じ、欲や怒り、愚かな行いから解放されるという場合とがある。いずれの「念」も継続的であり、その点で、深い思いである。これらの「念」には、「信じる」ことにもつながり、また、強く念じることによって「仏」の姿を想念するという意味もあるろう。

【「深」字と共に使われる例】

- 1 我記如是人 来世成仏道 以深心念仏 修持淨戒故 此等聞得仏 大喜充遍身 (方便便第二 8頁上12行目)

- 2 知衆生諸行 深心之所念 過去所習業 欲性精進力 及諸根利鈍 以種種因緣 (譬喻品第三 9頁中17行目)
- 3 若我等得仏 衆生亦復然 世尊知衆生 深心之所念 亦知所行道 又知智慧力 欲樂及修福 宿命所行業 世尊悉知已 (化城喻品第七 23頁上7行目)
- 4 世尊。我等志願。如來知見。深心所念。仏自証知。(化城諭品第七 25頁上25行目)

【「常」字と共に使われる例】

- 5 如是諸天衆 常來至其所 諸仏及弟子 聞其說法音 常念而守護 或時為現身 (法師功德品第十九 49頁下21行目)
- 6 若有衆生。多於婬欲。常念恭敬。觀世音菩薩。便得離欲。若多瞋恚。常念恭敬。觀世音菩薩。便得離瞋。若多愚癡。常念恭敬。觀世音菩薩。便得離癡。無尽意。觀世音菩薩。有如是等。大威神力。多所饒益。是故衆生。常一心念。(觀世音菩薩普門品第二十五 57頁上2行目)
- 7 諍訟經官処 怖畏軍陣中 念彼觀音力 衆怨悉退散 妙音觀世音 梵音海潮音 勝彼世間音 是故須常念(觀世音菩薩普門品第二十五 58頁上27行目)

また、動詞「念」字は、次に示すように「一心」と共に使われる。用例8は、「一人で他人の家に入るときは、一心に仏を念じ、加護を受けよ」という内容で、用例9は、「人里で乞食を

する場合は、僧と共に行き、僧がいなければ一心に仏を念じ、仏の加護を受けよ」という内容である。用例10は、説法の因縁だけを一心に念じること、用例11は、仏の供養のことだけを一心に念じることという内容である。これらの「念」も「常」「深」とともに使われる動詞「念」字と同じ意味で、「心を集中する」「深くかつ持続的」という意味的特徴が「念」にあると考えられる。

【「一心」と共に使われる例】

- 8 不独入佗家。若有因縁。須独入時。但一心念仏。(安樂行品第十四 37頁中7行目)
- 9 入里乞食 将一比丘 若無比丘 一心念仏 (安樂行品第十四 37頁下8行目)
- 10 衣服臥具 飲食医薬 而於其中 無所怖望 但一心念說法因縁 願成仏道 令(安樂行品第十四 38頁上12行目)
- 11 便語諸菩薩大弟子。及天。龍。夜叉等。一切大衆。汝等当一心念。(藥王菩薩本事品第二十三 53頁下25行目)

また、次の例のように「堅固」と共に使われる「念」も、思いの強さ、深さを示しているであろう。次に示すように、いずれも「志念堅固」という形で表される。「志念」自体に、「深く思い定める」というような、強い思いの意味がある。その「志

「念」が「堅固」とともに使われることによって、一層、思いの強さが表現される。特に用例12、15は、「忍辱」と共に使われ、「志念」の「堅固」なことと、「忍辱力」すなわち「耐え忍ぶ力」が関連していることを示す。これは、漢語動詞「念ず」が、「耐え忍ぶ」「我慢する」という意味を持つに至る過程を考えるうえで、示唆的であろう。

【「堅固」と共に使われる例】

- 12 智慧_二叵思議 其志_一念堅固 有大忍辱力 (從地湧出品第十 五 40頁中27行目)
- 13 志念力堅固 常勤求智慧 說種種妙法 其心無所畏。(從地湧出品第十五 41頁中21行目)
- 14 若復勤精進 志念常堅固 於無量億劫 一心不懈怠。(分別功德品第十七 45頁上15行目)
- 15 復能清淨持戒。与柔和者。而共同止。忍辱無瞋。志念堅固。常貴坐禪。得諸深定。精進勇猛。撰諸善法。利根智慧。善答問難。(分別功德品第十七 45頁下13行目)

さきに「志念堅固」と「忍辱力」との関係について述べた。

そこで、次に、「念」と「忍」の関係について確認しておくこととする。「念」が「忍」と共に使われた例としては、次のものを挙げる事ができる。

用例16は、「法師が説法するときに、他人が口悪く罵り、刀や杖、瓦や石で危害を加えても、仏を一心に念じて耐え忍べ」という内容である。用例17も、「仏の説く真意を理解しない末世の悪僧から、悪口を浴びせられ、寺を追い出されるといふ迫害を受けても、仏を念じて耐え忍びなさい」という内容である。このように用例16、17のどちらの例も、「仏を念じる」ことによって、苦難を耐え忍ぶことができると説いている。

【「忍」と共に使われる例】

- 16 若説此經時 有人惡口罵 加刀杖瓦石 念_一仏故_二忍_一。(法師品第十 32頁上24行目)
- 17 濁世惡比丘 不知仏方便 隨宜所說法 惡口而鬻躄 數見擯出 遠離於塔寺 如是等衆惡 念_一仏告_二勸_一故 皆當忍是事 (勸持品第十三 36頁下24行目)

このように妙法蓮華經では、一心に、かつ常に深く「仏を念じる」ということにより、様々なことを耐え忍ぶということが可能になると説く。このように動詞「念」字が「忍」につながるといふ考え方は、「源氏物語」などの和文で使われる漢語動詞の「念ず」に「祈る」という意味のほかに、「我慢する」という意味が存することと関連して考えることができる。すなわち、仏を一心に思い描くことによって耐え忍ぶ、我慢するという考

え方が、仏典の伝来とともに早くから存したのであろう。動詞「念」字自体には、漢籍においても仏典においても「忍」の意味はないのであるが、仏典での「念」から「忍」へとという展開が、本邦の「念ず」に「耐え忍ぶ」という意味が新たに生じた原因であろう。このように考えると、源氏物語などの和文で使われる「念ず」は、仏典の動詞「念」字を取り入れて作られた漢語動詞であろうと推察できるのである。

(2) 「思」の意味

次に、妙法蓮華經に使われた「思」の意味について確認する。まず、使用上の大きな違いは、「念」に比べて使用数がかなり少ないという特徴がある。これは、「念仏」に代表されるように、妙法蓮華經が「仏」を想念することが信仰の基本にあるからである。これは、ここでは詳しく取り上げないが他の經典についても同様のことが言えるであろう。仏教の教義と関わるかどうかという観点から言えば、「思」は「念」ほどには、本質的に教義と関わっていないのであろう。このことが現象的には、用例数の多寡の違いとなって現れていると考えられる。

さて、妙法蓮華經における「思」の意味であるが、後掲に例として示すように、いずれも「考える」「思い量る」という意味で、「念」のように深く思い描くという意味ではなく、思考するという意味を表している。

用例1は、名詞的用法の「思」であるが「尽思」の形で、「度量」を修飾している。「度量」は「思い図る」「考える」という意味であるから、それを修飾する「尽思」にも、これと類似する意味があると想定できる。用例2は、「思」単独で動詞として使われている例で、「思」の対象は「仏実智」であり、意味は「考える」あるいは「考えて理解する」という意味である。用例3も、「思」単独字で動詞として使われている例で、対象は「法」である。意味は、用例2と同じく、「考える」あるいは「考えて理解する」という意味である。4の例は、「思量分別」の例である。これも、「思」単独で動詞として使われた例ではないが、「思量」すなわち「思い量る」という意味である。これらの「思」には、仏などを想念するという意味はなく、深遠な仏法の真理を理解し悟るという意味である。また、「思」字の例としては、ここでは用例は挙げないが、「不可思議」「不思議」「思議」という熟語で使われる。また、「思惟」という熟語も存する。これらの「思」にも「思い量る」という意味を認めてよいであろう。ただ、「思念」という熟語も存することから、「思」と「念」は、意味が大きく異なる字ではないことも確認できる。

1 仮使滿世間 皆如舍利弗 尽思共度量 不能測仏智。(方便品第二 6頁上3行目)

2 斯等共一心 於億無量劫 欲思仏実智 莫能知少分。(方

便品第二 6頁上10行目)

- 3 止不須説 我法妙難思。(方便品第二 6頁下19行目)
- 4 是法非思量分別。之所能解。(方便品第二 7頁上10行目)

三 訓点資料の「念」

これまで漢籍や仏典の「念」の意味について、確認してきた。ここでは、漢籍や仏典の動詞「念」字の訓読の状況について確認する。本稿では、漢語動詞「念ず」の成立過程の解明を視座に据えているので、まずは、訓点資料の「念」の訓読を確認し、漢文訓読における「念ず」の実態について確認しておくこととする。

動詞「念」字の訓読の状況を見ると、①資料中の動詞「念」字をすべて「オモフ」の和訓で読んだもの、②資料中の動詞「念」字をすべて「念ズ」と漢語動詞で読んだもの、③同一資料中に「オモフ」と「念ズ」の訓が存するものに分類できる。後に、それぞれの資料名を挙げた。

後掲の分類から、動詞「念」字をすべて「オモフ」と読むのは、白氏文集や史記など、漢籍であることが分かる。一方、大毘盧遮那成仏経疏や妙法蓮華経などの仏典は、同一訓点資料中に、動詞「念」字を「オモフ」と読む例と「念ズ」と読む例と

がある。仏典での動詞「念」字は、「念ズ」と読むのを中心としながら、その中に「オモフ」と読む例が混じるというような状況である。動詞「念」字をすべて「念ズ」と漢語動詞で読んでいる訓点資料には、阿字義があるが、「念ズ」と読んだ例が8例と比較的少ないため、「オモフ」の訓がないのはそのことによるのであろう。

ここで、仏典において、「念ズ」と「オモフ」という両訓が見られる理由を考えてみたい。その原因として、まず考えたいのは、意味による読み分けがされているかどうかという点である。先に、「念」の意味を、「念仏」に代表されるように、「心に深く持続的に思い、対象を想起する」とした。この意味が、「念ズ」と読まれている動詞「念」字に認められるかどうかを確認しておきたい。

そこで、ここでは、比較的用例数の多い、興福寺蔵大慈恩寺三蔵法師伝と高山寺蔵大毘盧遮那成仏経疏と妙法蓮華経を取り上げて、動詞「念」字の意味と、読みとの関係について考えてみたい。

- ①資料中の動詞「念」字をすべて「オモフ」の和訓で読んだもの
東大寺諷誦文稿⁽⁴⁾ 神田本白氏文集⁽⁵⁾ 史記⁽⁶⁾ 古文尚書⁽⁷⁾
- ②資料中の動詞「念」字をすべて「念ズ」と漢語動詞で読んだもの

阿字義

③同一資料中に「オモフ」と「念ズ」の訓が存するもの

興福寺藏大慈恩寺三藏法師伝⁽⁸⁾ 高山寺藏大毘盧遮那成仏
 經疏⁽⁹⁾ 妙法蓮華經⁽¹⁰⁾ 成実論天長点⁽¹¹⁾ 大日經義釈⁽¹²⁾ 八字文殊
 儀軌古点⁽¹³⁾ 東大寺藏法華文句⁽¹⁴⁾ 四分律古点⁽¹⁵⁾ 大乘大集地蔵
 十輪經⁽¹⁶⁾ 法華義疏⁽¹⁷⁾ 唐招提寺藏四分律行事鈔⁽¹⁸⁾ 大智度論⁽¹⁹⁾

(1)「興福寺藏大慈恩寺三藏法師伝」の「オモフ」と「念ズ」

ここでは、興福寺藏大慈恩寺三藏法師伝の動詞「念」のうち、和訓の「オモフ」と漢語動詞の「念ズ」と読んだ例を取り上げ、「念」の意味と訓との関係について考える。後に示す用例は、和訓読みか漢語読みかを判断できる、ほぼ全例を挙げている。ただし、「念ハク」の例は、取り上げていない。

まず、「念」を和訓「オモフ」と読んだ例を挙げ、「念」の意味と訓との関係について考える。1の例は、雪山王が、訖利多王の群臣に向かって発した言葉の中で「念」が使われた例で、「群臣が仏法を破壊しようと思つている」という内容である。ここでの「念」の意味は「思考する」という意味である。ただし、「思考する」の意味としたが、実際には様々なことを思つたり考えたりすることを表し、その意味内容は一様ではない。時には「思慕する」に近い意味の場合もあり、「追想する」という意味に近い場合もある。2は、玄奘から惠天法師に宛てた書状の中

で使われた「念」で、「徳を思い仁を願つたので疲れが積もつてゐる」という内容である。ここでは、「思考する」という意味である。用例数が2例ではあるが、「念」を和訓の「オモフ」と読む場合は、いずれも「念」の意味が「思考する」のときであるといえよう。

1 【念】^(反徳)爾(ル)に諸奴ノ仏法ヲ毀懷(壞) (スルコトヲ)

念フ、(卷五・193行目)

2 又 加^{シカミナラス} 徳ヲ念ヒ仁ヲ欽ヒテ唯勞^{ネガ}(去) 積^{タケ}(入) 輕^{ユクカ}を豊ニ
 ス、(卷七・345行目)

次に、漢語動詞「念ズ」として読んだ例を対象に、意味と訓との関係について考える。3の例は、観音菩薩をヲ格に取る例である。観音菩薩は信仰の対象であることから、ここでの「念」の意味は「心の中に強く思い描く」という意味であると考えられる。4の例も観音菩薩と般若心経という信仰の対象をヲ格に取ることから、「念」は「心の中に強く思い描く」という意味であると考えられる。5の例も、観音をヲ格に取つてゐることから、「念」は「心の中に強く思い描く」という意味であると考えられる。このように、「念」を漢語動詞として読む場合は、「念」が「心の中に強く思い描く」という意味であることが分かる。例の3、4、5には、いずれも観音菩薩という対象が明示され

ているように、漢語動詞で読まれた「念」には、「心の中に強く
思い描く」明確な対象が示されている。

このように、「興福寺藏大慈恩寺三藏法師伝」において、動詞
「念」字を和訓で読むか、漢語動詞で読むかは、「念」の意味の
違いによって読み分けていられると考えられる。

3 即(チ)起(チ)テ経ヲ誦シ、観音菩薩ヲ念ス。(卷一・

211行目)

4 但(シ)観音菩薩(ト)「及」般若心経(ト)ヲ念ス(卷

一・255行目)

5 是於(ヲ)觀音ヲ念シテ専ニ觀音ヲ念シテ西北ニシテ「而」進

ム。(卷一・264行目)

(2)「高山寺藏大毘盧遮那成仏経疏」の「オモフ」と「念ズ」

ここでは、「高山寺藏大毘盧遮那成仏経疏」の動詞「念」を対
象に、意味と読みとの関係について考える。用例数は、和訓の
「オモフ」と読んだ例が19例で、漢語動詞「念ズ」と読んだ例が
4例である。

まず、和訓で読んだ例を対象に、読みと意味との関係につい
て考える。

「オモフ」のように和訓として読んだ例6の「念」の意味は
「思考する」という意味であると考えられる。思考する内容は、

「法利(を)求(むる)コト」である。7の例の「念」の意味
も「思考する」で、思考する内容は「常に経し所の樂の事」で
ある。卷二には、「念」を「オモフ」と読んだ例が他に13例ある
が、「念」の意味はすべて「思考する」である。例8は、「念」
を和訓で読んだもので、ここでの「念」の意味も「思考する」
であると考えられる。思考する内容は、「利他」すなわち「他を
利すること」である。例9の「オモフ」と読んだ「念」も、「思
考する」という意味で、思考する内容は、「真言の大悪不動大力
本漫荼羅の中に住せり」の部分である。

6 早(ク)法利(を)求(むる)コトヲ念フ「心」シ、

(卷二・306行目)

7 常に経し所の樂の事を念ひ、或(イ)は他の容色恣態

(墨平)等を想(ひ)て、(卷二・309行目)

8 須(ク)、養(ヤシ)ふに大悲胎藏を以てして増広なることを得

令(も)む【須】。故に、常に利他を念ふ・【之】性・有(ら)む
者(も)に、方に伝授す可しと云ふ【也】。(卷三・609行目)

9 真言の大悪不動大力本漫荼羅の中に住せりと念へ。(卷

九・710行目)

次に、「念ズ」と漢語動詞で読んだ例を挙げ、「念」の意味と
訓の関係について検討する。

例10の「念」の意味は、「心に強く思い描く」という意味であると考えられる。ただし、ここでの「念」は、先に挙げた「大慈恩寺三蔵法師伝」の「念」のようには、漢音菩薩のような明確な対象が示されていない。ここでの「念」の対象は、「一切の賢聖の断すべき所の者」である。この点、「思考する」という意味との違いが不明瞭にはなるが、「思考する」という意味の「念」が「トオモフ」「コトヲオモフ」のように、主に行うべき行動や思考の内容について言うのに対して、「心に強く思い描く」という意味の「念」は、「一切賢聖所断者」のように、具体的な対象が、名詞句として明示されている。

11の「念」の意味も同様に、「心に強く思い描く」という意味であると考えられる例である。この例の「念」も、その内容が、「是の聲人の作することは無し。但し聲の転するを以ての故に更に響の聲有り、人の耳根を誑カスなり」であり、心に思い描く具体的な内容が示されている。「思考する」の意味との違いが不明瞭であるが、ここでの「念」の対象は、心の中で思い描いた対象ではないが、真言聲という深く信じるべき対象そのものの効力について語ったところであり、行動や思考内容を示してはいない。このように考えると、ここでの「念」の意味も、「心に強く思い描く」という意味であると考えられる例である。

高山寺蔵大毘盧遮那成仏経疏においては、和訓で読む「念」と漢語で読む「念」の意味の違いが、大慈恩寺三蔵法師伝に比

べて、やや不明瞭であるが、大慈恩寺三蔵法師伝と同様、和訓と漢語の読みは、「念」の意味の違いに応じて読み分けられていると考えられる。

10 當に一切の賢聖の所断断の「イ、断(す) 応(き) 所(の)」者を念す「當」し。(卷二・491行目)

11 智者は心に念す(らく)・是の聲(は) 人の作することは無し。但し聲の転(する)を以(て)の故に、更に響の聲有(り)、人の耳根を誑(たふ)カスなり(卷九・172行目)

(3)「妙法蓮華経」の「オモフ」と「念ス」

次に「妙法蓮華経」の「念」の読みについて確認する。妙法蓮華経の訓点本で伝存するものは、いくつか知られているが、ここでは「山田本妙法蓮華経方便品第二(平安時代極初期)の訓点本と、「立本寺本」(寛治元年―承徳三年加點)を取り上げる。

まず、山田本で、和訓の「オモフ」として読んだ例を挙げて、「念」の意味と読みとの関係を確認する。用例12の「念」の意味は、「思考する」であろう。「思考する」対象は、「吾當ニ汝ガ為ニ分別シ解説セム」とあるように、仏が説く話の内容である。その意味を深く考えよという意味である。なお、「山田本」で

「念」を和訓「オモフ」として読んだ例は、後掲の一例のみで

あった。ただし、この例は「思念」を「思ひ念へ」と読んだものである。

12 汝今諦ツツに聴は(き)たまへて。善く思へ・ヒ念へ

「之」。吾當に汝か為に分別し解説せむ(と)のたまふ。(90
行目)「本用例文は所収翻刻文に基づき筆者が訓読した。以下、山田本の例文も、筆者の訓読である」

次に、立本寺本で、「念」を和訓の「オモフ」として読んだ例を挙げて、「念」の意味と読みとの関係を確認する。

13 尋タツネ(て)過去の仏の所行の方便の力を念オモフに我か今得タル所の道をも亦三乗と説ク応ハシト。(24頁下段)

14 我レ過去の世の無量無辺の劫を念へば、(37下段)

用例13の「念」は「思考する」という意味で、「過去の仏の所行の方便の力」について、あれこれと思案をめぐらすという内容を示す。「過去の事態」について、現時点で考察するという意味である。用例14の「念」も「思考する」という意味で、「過去の世の無量無辺の劫」について思案をめぐらすという内容を示す。立本寺本で「オモフ」と読まれた他の「念」の意味を確認すると、すべて「思考する」という意味である。以下、「思考す

る」対象を挙げると、「過去の劫」(69頁下段)、「世俗の事」(76頁上段)のようである。対象が文中に示されない例もあるが、「仏の言説」が対象であろうと思われる。(72頁上段)(90頁下段)

次に立本寺本で、漢語動詞の「念ズ」として読んだ例を挙げる。なお、山田本には「念」を漢語動詞で読んだ例は無かった。以下、例として挙げるのは、立本寺本の全ての「念ズ」の例である。

15の例は対象が「仏」であることから、「(信仰の対象を)心の中に強く思い描く」という意味であると考えられる。16は、一文のなかに「念じ」と「思し」が使われた例で、「念じ」「思し」ともに、対象は「何の事」である。同じ対象なので、「念じ」と「思し」は同じ意味として解することもできる。用例17・18も、対象が「仏」の例である。用例19も、対象は示されていないが「仏」であると考えることができて「大乘」であるが、これも信すべき対象として考えることができる。用例22は、「不善」であり、仏ではなく、「殺」「盗」「淫」である。ただし、「不善」なるものも、心に思い描く対象と云う点では、「仏」「仏の力」と同類であろう。用例23は、「仏大覚の身の力・無畏に成サレ所(タマへ)る」が対象であり、「仏の力」として考えてよいであろう。このように、対象そのものや、

対象が引き起こす事象や力に対して、「一心に深く思い描く」という意味を表すのが、「念ズ」と読まれる「念」の意味なのであろう。

以上述べてきたように、立本寺本では、「思考する」の意味を表す「念」と、「一心に思い描く」という意味の「念」は、それぞれ和語動詞と漢語動詞に読み分けていると考えられる。仏典における訓点資料の「念ズ」は、主に「仏」を対象に取るという点で和文資料で使われている「祈る」という意味の「念ズ」と重ね合わせて考えることができる。

- 15 深き心を以て仏を念じ (20頁上段)
- 16 何の事をか念じ、何の事をか思し、何の事をか思し、何の事をか修する。(28頁下段)
- 17 但し一心に仏を念じタテマツレ。(78頁上段)
- 18 一心に仏を念じタテマツレ。(79頁上段)
- 19 汝等當に心を一(に)して念す【當】シ。(99頁下段)
- 20 心に大乘を念じて昼夜に捨テ不。(116頁下段)
- 21 大莊嚴の心を發せる者、大乘(を)念ずる者、(118頁下段)
- 22 心(とは)【者】、諸(の)不善を念ずるなり。(125頁上段)
- 23 仏大覺の身の力・無畏に成サレ所るを念せむ。(127頁上段)

段)

四 上代文献の「念」「思」

四―一 『日本書紀』の「念」「思」

今まで、中国文献に使われた「念」の意味について見てきた。ここでは、日本の上代の文献の「念」を対象に、「思」の意味と比較することによって、「念」の意味について確認する。

(1) 「念」の意味

『日本書紀』⁽²⁰⁾の「念」の意味を動詞と名詞とに分けて考えてみると、結論としては、「念」は感情的な思いを表すといえる。具体的な感情としては、「願望」「感慨」「憂慮」が挙げられる。「願望」とは、何かを願うことであり、「感慨」とは眼前の事物や過去の出来事に対して、自分の人生と関わらせながら思索を深めることであり、「憂慮」とは、ある出来事について将来について悲観的に思うことである。「感情的に思うこと」に対して、「理論的、計画的に思うこと」を意味するのが、次項に掲げる「思」である。

用例1の「恒念合大娘皇女」とは、「ずっと大娘皇女と結婚したいと思っていた」という意味である。用例2の「自念将刑」とは、「殺そうと思う」という意味である。これらの「念」は、

「結婚したい」「殺したい」という願望を表す。

用例3の「興言念此」とは、「過去の執政を言葉に出して振り返る」という意味で、用例4の「言念先祖与旧早岐和親之詞」とは、「わが先祖と当時の早岐との和親の言葉を思う」という意味である。これらの「念」は、「過去の執政」や「先祖と早岐との和親の言葉」という過去の出来事感慨を込めて振り返っている。

用例5の「毎念於茲」の「茲」は「後継ぎがないこと」であり、用例6の「寡人念茲」は、「新羅の奸計にひつかかって国家を滅亡させること」であり、いずれも憂慮の思いを表している。

次に名詞の「念」の意味について確認する。名詞の「念」の意味も、動詞の「念」の意味と対応し、感情的な思いを意味する。

用例7の「念」は、「東方に美しい国があるので、そこを国の中心としたいという願望」であり、用例8の「念」は、「子孫に自分の後を託したい」という願望である。

用例9の「念」は、「天皇を怒らせたという後悔」である。

用例10の「念」は、「任那の再建が実現しないことへの憂慮」である。

このように、『日本書紀』の「念」は、動詞的用法も名詞的用法も、いずれにおいても「願望」「感慨」「憂慮」など、感情的

な思いを表していることが確認できた。

先に、漢籍の「念」の意味が、感情的な思いであり、「心に深く止めること」を表すことを述べた。『日本書紀』の「念」も感情的な思いを表しており、漢籍の「念」と『日本書紀』の「念」の意味は同じであると考えてよいであろう。

○動詞の例

「願望」

1 太子恒念_レ合大娘皇女、畏有罪而默_レ之。(卷十三 允恭天皇

② 124頁7行目)

2 天皇便疑御田奸其采女、自念_レ将刑、而付物部。(卷十四

雄略天皇 ② 190頁14行目)

「感慨」

3 興言念_レ此、唯以留恨。(卷十四 雄略天皇 ② 208頁11行

目)

4 言念_レ先祖与旧早岐和親之詞、有如皎日。(卷十九 舒明天

皇 ② 372頁7行目)

「憂慮」

5 毎念_レ於茲、憂慮何已。(卷十八 安閑天皇 ② 336頁12行

目)

6 寡人念_レ茲、劳想而不能自安矣。(卷十九 舒明天皇 ② 374

頁7行目)

○名詞の例

〔願望〕

7 我亦恒以為念。(卷三 神武天皇 ①194頁6行目)

8 人生子孫誰不属念。(卷十四 雄略天皇 ②210頁1行目)

〔後悔〕

9 以後繫念相統、因建任那、且夕無忘。(卷十九 欽明天皇

②368頁10行目)

〔憂慮〕

10 朕念在茲。(卷十九 欽明天皇 ②378頁13行目)

(2) 「思」の意味

次に「思」の意味について確認する。

ただし、『日本書紀』の「思」には、名詞的用法はなく、すべて動詞的用法であった。

用例1の「思」は、天の岩屋に隠れた天照大御神を岩屋から出すために思兼神が、「因造彼神之象、而奉招禱」という方法を考え出したことを意味する。すなわち、「思」は、「熟考して策を練る」という意味であろう。用例2の「可不深思而熟計歟」とは、「任那の再建のために熟考して策を練る」という意味である。

用例3の「思」は、「兄王が謀叛を起こすのは、まさにこの時だと考えた」という意味で、「思」は、さまざまな条件を照らし

合わせて思案した結果、結論を導き出したことを表す。

用例4の「思」は、「仲皇子が、太子はすでに逃亡されたと判断した」という意味で、ここでの「思」もさまざまな条件を照らし合わせて思案した結果、結論を導き出したことを表す。

このように、『日本書紀』の「思」の意味は、「熟考して策を練る」という意味と「事象から結論を導き出す」という意味がある。これら二つの意味は、「感情的に思う」という「念」の意味に対して、「理論的、計画的に思う」という意味を表わす。このように、「念」と「思」の意味は、異なることが確認できる。

先に述べたように、漢籍の「思」には、「感情的に思う」と「理論的、計画的に思う」という意味が存し、「感情的に思う」という意味を表す「念」と、意味が重なり合うところがあった。これに対して、『日本書紀』の「思」は、「念」との意味の重なりは見られない。日本の上代文献では、漢籍の「念」「思」の意味を踏襲しながら、「念」「思」の意味の重なりを除き、それぞれ別の意味として使い分けていることがうかがわれる。「念」「思」の意味の重なりが除かれたことにより、読み手にとって文章の内容を理解しやすいようにしているのであろう。

〔熟考して策を練る〕

1 時有高皇産霊之息思兼神云者。有思慮之智。乃思而白曰、
宜因造彼神之象、而奉招禱也。(神代上 ①78頁13行目)

- 2 此誠千載一会之期、可不深思而熟計歟。(卷十九 欽明天皇 ②402頁1行目)

〔事象から結論を導き出す〕

- 3 於是皇后既無成事、而空思之、兄王所謀適是時也。(垂仁天皇 卷六 ①308頁5行目)
- 4 仲皇子思太子已逃亡、而無備(履中天皇 卷十二 ②84頁11行目)

四―二 『古事記』の「念」「思」

(1) 「念」の意味

『古事記』には、「念」の用例が二例しかない。これは、『日本書紀』に比べて文字数が少ないためと考えられる。

以下の用例の「念」の意味を見ると、『古事記』の「念」も『日本書紀』と同じように、感情的な思いを表すといえる。

用例1の「念」は動詞の例で、「豊玉姫が天つ神を父とする御子は海辺で産みたい」と思うことについていう。ここでの「念」は、「願望」に当たるであろう。用例2の「念」も動詞で、「私は、いつも移動するときは天を翔けよう」と思っていたことについて言う。今は体が思うように動かなくなり、薨去を前にした倭建命の言である。ここでの「念」の意味は、「憂慮」に当たるであろう。このように、『古事記』の念も、理論的、計画的な

思考ではなく、感極まった時の感情的な思いであり、『日本書紀』の「念」の意味と同じであると判断する。

〔願望〕

- 1 於是、海神之女豊玉毘売命、自參出白之、妾、已妊身。今、臨産時、此念、天神之御子、不可生海原。(上巻 134頁5行目)

〔憂慮〕

- 2 自其処発、到当雲野上之時、詔者、吾心、恒念自虚翔行。(中巻 232頁1行目)

(2) 「思」の意味

用例1の「思」は、思金神が、天の岩屋に隠れた天照大御神を岩屋から出す方法を考えることについていう。ここでの「思」の意味は、「思考する」である。用例2は、天照大御神が、岩戸の外で神々が笑い楽しんでいるのを見て、太陽をつかさどる神は自分しかないはずなのにどうしたことかと思考することについていう。用例3には動詞の「思」が二例あるが、はじめの「思」は、須佐之男命が八岐大蛇の九尾を切断した時、刀が堅いものに当たったのでなぜかその原因を思考することについていう。次の「思」は、八岐大蛇の尾から出てきた刀を不思議だと思考することについていう。用例3の二つの「思」はともに、

八岐大蛇の体内から刀が出現したことについて、その理由を思考するという意味である。用例4は、妻の須勢理毘売が葬式の道具を持って泣きながら来たので、父の須佐男之命は、夫の大穴牟遲神は死んだと考えて、野に出で立ったという内容で、ここでの「思」は、妻の様子などから思考して、夫は死んだと判断したというものである。ここでの「思」も「思考する」という意味である。『古事記』には、用例として挙げた四例の他に、三十二例の「思」があるが、すべて「思考する」という意味だと判断できる。『日本書紀』の「思」の意味としては、「熟考して策を練る」という意味と「事象から結論を導き出す」という意味があったが、『古事記』の「思」にも、同じ意味が確認できる。用例1は、「熟考して策を練る」という意味であり、用例2、3、4は「事象から結論を導き出す」という意味である。

このように、『古事記』の「思」の意味も、『日本書紀』と同じく、「念」とは異なる意味で使われている。

『古事記』の「念」と「思」も、意味的な重なりは見られない。この点、『日本書紀』の「念」「思」と同じである。漢籍では、「念」「思」の意味に重なるところがあったが、『日本書紀』『古事記』では、「念」「思」の意味を区別して使っている。文章の内容を理解しやすくするという工夫が、上代文献の『日本書紀』や『古事記』にはあったのだろうか。そう考えられなければ、中国文献の意味をそのまま取り入れるのではなく、日本に合った

工夫がみられるということになる。

- 1 是以、八百万神、於天安之河原、神集々而、高御産巢曰神之子、思金神令思而、集常世長鳴鳥、令鳴而、取天安河之河上之天堅而、取天金山之鉄而、求鍛人天神麻羅而、科伊斯許理度完命、令作鏡、科玉租命、令作八尺勾瓏之五百津之御須麻流之珠而、(略)而、踏登杼呂許志、為神懸而、掛出胸乳、裳緒忍垂於番登也。(64頁2行目)
- 2 爾、天宇受売白言、益汝命而貴神坐故、歡喜咲楽、如此言之間、天兒屋命。布刀玉命、指出其鏡、示奉天照大御神之時、天照大御神、逾思奇而、稍自戸出而、(上卷 66頁6行目)
- 3 故、切其中尾時、御刀之刃、毀。爾、思怪、以御刀之前刺割而見者、在都牟羽之大刀。故、取此大刀、思異物而、白上於天照大御神也。(上卷 70頁13行目)
- 4 於是、其妻須世理毘売者、持喪具而哭来、其父大神者、思已死訖、出立其野。(82頁8行目)

五 『日本靈異記』の「念」「思」

(1) 「念」の意味

最後に、『日本靈異記』⁽²²⁾の「念」「思」の意味について見てお

く。先に述べたように『日本書紀』や『古事記』の「念」には、「祈る」という意味は見られなかった。ここで、仏教説話である『日本靈異記』を取り上げ、平安初期には仏教説話において、「念」が「祈る」という意味で使われているかどうか確認しておく。

次に示すように、『日本靈異記』にも、『古事記』や『日本書紀』と同じように、「願望」「感慨」「後悔」の意味で「念」が使われている。「憤怒」「疑念」「確信」の意味が加わったが、これらにも、「心に深く思う」という共通した意味が認められ、論理的な思考を介さない感情的な思いであるという点では「願望」「感慨」「後悔」と同じである。『日本靈異記』では、これに「祈る」という意味が加わった。用例10、11の「念」は、対象が信仰の対象である「観音」である。「念」は、観音を一心に思うことを意味するであろう。「心に深く思う」という意味だという点では、他の意味と共通するところがあるが、「祈る」の意味の「念」は、仏典の影響により生じたと考えられる。『日本書紀』や『古事記』が編まれたころはまだ仏教の意味の「念」が生じていなかったか、内容が仏教と関わらないためにこのような「念」が使用されなかったのかは定かではないが、「祈る」という意味の「念」は、「願望」や「感慨」などの意味の「念」とは遅れて使われ始めたのであろう。これは、仏教の伝来や広まりとも関係がある。ただ、先に述べたように、仏典の訓点資料

では、「念」の意味により、和語動詞と漢語動詞の読みわけがされており、平安時代初期には、すでに「祈る」という意味の仏教語「念」は漢語動詞として使われはじめていたと考えられる。『日本靈異記』で使われた「祈る」という意味の「念」も恐らくは、漢語動詞「念ズ」として読まれたものと推測される。

【願望】

1 長大、年十有餘頃、聞之朝廷有力人、念試之、來於大宮邊居。(卷上第三 71頁12行目)

2 僧即心念「明日得物、不如取被而出。」(卷上第十 99頁5行目)

【感慨】

3 小子視念「名聞力人者是也。」○

4 力王終不得捉、念自我益力少子。更不追。(卷上第三 73頁9行目)

【後悔】

5 大懼念、言向於大德、舉誹妒心。(卷中第七 199頁1行目)

6 「我忘一語、不得念忍。故還來也。」(卷下第三十 407頁10行目)

【憤怒】

7 狐念無禮、打起、依即二手持捉、葛韃以一遍打。(卷中第

四 183頁13行目)

【疑念】

8 其臭如魚。俗念非經。(卷下第六 333頁7行目)

【確信】

9 彌猴答言、「朝廷臣貺我。而有典主、念之已物、不免我。我恣不用。」(卷下第二十四 387頁1行目)

【祈る】

10 居斷橋上、心念觀音。(卷上第六 89頁4行目)

11 各立誓願、念彼觀音。(卷上第十七 113頁4行目)

(2) 「思」の意味

先に述べた『日本靈異記』の「念」の意味に対して、「思」の意味は、「思考する」という意味である。用例1は、法師が眼前の人物の姿や行動により、「我國聖人」と判断したことを表す。用例2は、病となった原因をあれこれと考えた結果、「由殺生業」と判断したことを表す。用例3は、相手が机に向かって暮れまですつと動かないことから、「睡眠」と判断したことを表す。いずれの「思」も、眼前の状況や過去の事象をもとに判断するという意味であり、「念」とは異なる意味で使われていることが確認できる。したがって、『日本靈異記』の「念」「思」の意味の関係は、「念」に新たに「祈る」という意味が現れたことを除けば、『日本書紀』『古事記』と同じであると考えられる。

1 法師問、誰答、「役優婆塞。」法師思之、「我國聖人。」(卷上第二十八 大系137頁10行目)

2 思之、「我得重病、由殺生業。」(卷中第五 大系187頁11行目)

3 就机迄于暮而不動。侍者童男、思之睡眠、驚動白言(卷下第九 大系339頁9行目)

六 ま と め

本稿では、「祈る」という意味を表す漢語動詞「念ず」の成立の状況を確認することを念頭に置きながら、中国文献における「念」「思」の意味を確認し、仏典の訓点資料を対象に「念」の意味と読みとの関係について確認した。さらに、日本における「念」「思」の受容の方法について、文献上確認できる範囲ではあるが、漢字表記の在り方が試みられ、定着し始めた時期に成立した『日本書紀』や『古事記』、さらには成立が下るが仏教的内容を記すという点で、『日本書紀』や『古事記』とは異なる『日本靈異記』を取り上げ、「念」「思」の意味を確認した。

結論としては、中国の古代文献の「念」「思」は、感情的な思いは「念」「思」ともに表し、判断に関わる思いは「思」が表すということであったが、日本では、感情的な思いは「念」が表し、判断に関わる思いは「思」が表すというように、「念」「思」

の意味は区別されている。このように、同じ和語動詞である「おもふ」であっても、「念」「思」という違う漢字を使い分けることによって文意を伝えやすくするという工夫がみられる。「析る」という意味の「念」は『日本書紀』『古事記』には見られないが、仏教的な内容を表す『日本書紀』には見られる。仏典の訓点資料において、「析る」という意味を表す「念」は「念ズ」という漢語動詞で読まれ、「思考する」という意味を表す「念」は「オモフ」という和語動詞で読まれており、「念」の意味の違いにより読み分けられていた。このように、漢語動詞「念ズ」は、漢籍の「念」「思」からではなく、仏典で使われていた「念」が、漢語動詞という形で日本に流入したと考えられる。

『源氏物語』などの和文の「念ズ」には、「析る」という意味の他に、「我慢する」という意味もある。この「我慢する」という意味の「念」は、中国の漢籍、仏典、さらには日本の『古事記』『日本書紀』『日本書紀』にも見出せない。したがって、「我慢する」という意味の「念」は、中国出自とは考えにくい。ただ、妙法蓮華経には、「忍」と共に「念」が使われる文脈も多いため、「念」の「一心に仏を思い描く」という意味が、「我慢する」という意味を発生させたとも考えられる。「念ズ」に「我慢する」という意味が認められることは、漢語の和語化という点においても興味深い事象である。

- (1) 『史記』の本文は、新釈漢文大系(明治書院)によった。
- (2) 『文選』の本文は、新釈漢文大系(明治書院)によった。
- (3) 用例の本文は、『大正新修大藏経 第九卷 法華部全 華嚴部上』(高楠順次郎 昭和35年 大正新修大藏経刊行会)によった。
- (4) 『東大寺諷誦文稿の國語学的研究 改訂新版』(中田祝夫著 風間書房 1979)
- (5) 用例検索は、『神田本白氏文集の研究』(太田次男 小林芳規著 勉誠社 1982)による。
- (6) 『国家図書館(台北)所蔵本史記夏本紀釈文』(訓点語と訓点資料 第一二二)(小助川貞次 池田証寿 渡辺さゆり 他 2009)による。
- (7) 『国宝古文尚書 卷第三 卷第五 卷第十二 重要文化財古文尚書 卷第六』(『東洋文庫善本叢書 7 勉誠出版 解題 石塚晴通 小助川貞次(2015)』による。
- (8) 用例検索は、『興福寺本大慈恩寺三藏法師傳古點の國語学的研究』(築島裕著 東京大学出版会 1965年—1967年)による。
- (9) 用例検索は、『高山寺古訓点資料 第三』(高山寺典籍文書綜合調査団 東京大学出版会 1986年)による。
- (10) 山田本妙法蓮華経方便品第二は、「故山田嘉造氏藏妙法蓮華経方便品古点釋文」(築島裕 小林芳規『訓点語と訓点資料 第七』(1956)により、立本寺本は、「立本寺藏 妙法蓮華経古点」(門前正彦『訓点語と訓点資料(別刊)』(1968)による。
- (11) 『東大寺圖書館藏本 成實論天長點(上)』(『東大寺圖書館藏本 成實論天長點(下)』(稲垣瑞穂 1954)による。
- (12) 『大東急記念文庫大日経義釋 卷第十三 併解說文(3)(4)』(鈴木健二『訓点語と訓点資料 第二十三』(1962)『訓点語と訓点資料 第二十七』(1963)による。
- (13) 『廣島大學藏 八文字殊儀軌古點』(本文・校異・譯文) (井上親雄『訓点語と訓点資料 第三十九』(1968)による)。

- (14) 用例検索は、『東大寺図書館蔵本「法華文句」古点の国語学的研究 本文編』(西崎亭 桜楓社 1992)による。
- (15) 『石山寺本四分律古点の国語学的研究』(大坪併治著作集 8) 風間書房 2001)による。
- (16) 『古点本の国語学的研究』(中田祝夫 勉誠社 1979)による。
- (17) 『古点本の国語学的研究』(中田祝夫 勉誠社 1979)による。
- (18) 「唐招提寺蔵四分律行事鈔卷下之三院政期点訓読文」(松本光隆 土居裕美子 岡野幸夫 『鎌倉時代語研究 第二十輯』(武蔵野書院 (1997)による。
- (19) 『石山寺本大智度論古点の国語学的研究』(大坪併治著 風間書房 2005)による。
- (20) 『新編日本古典文学全集 日本書紀 1・2』(小島憲之 他 校注・訳者 1994-1996 小学館)による。
- (21) 『新編日本古典文学全集 古事記』(山口佳紀 他 校注・訳者 1997 小学館)による。
- (22) 本文は、『日本古典文学大系 70』(遠藤嘉基、春日和男校注 1967)による。